

氏 名 鈴木 富 久  
学 位 の 種 類 博士 (社会学)  
学位授与年月日 2010年5月21日  
学位論文の題名 グラムシ『獄中ノート』の学的構造

## 【論文内容の要旨】

### 1. 本論文の要旨

イタリアのマルクス主義者アントニオ・グラムシ（1891-1937）の『獄中ノート』（最初は1948年～1951年に主題別で6巻に編集され、エイナウディ社から公刊）については、彼の『獄中書簡』（1947年公刊）への書評で「思索の人として、彼は我々とともにある」と評した「大知識人」ベネデット・クローチェ（1866-1952）の「一全体に統合する思想」がそこに欠如しているという批評もあって、これまで日本では「メモと覚え書による未完了・非体系的な集積」（片桐薫著『グラムシ「獄中ノート」解説』こぶし書房、2006年、216頁）、「非体系的な永続的作業」（同、131頁）と考える傾向が強く、『ノート』全体を貫く体系的思想・論理構造や方法論を解明する研究は稀にしかなされてこなかった（また、イタリアを始め外国でもこの点に関する研究はそれほど多くはないと思われる）。それは、イタリアで1975年に『ノート』執筆年代順のジェルラターナ校訂版の全四巻が公刊され、日本でもその全訳（全6巻・別巻1）が企画されたが、しかし結局のところ翻訳ノートを除く29冊のノートのうちQ（quaderno）1とQ2しか出版されずに（V・ジェルラターナ編・獄中ノート翻訳委員会訳『グラムシ獄中ノートI』大月書店、1981年）、未だに『ノート』全体を日本語で読むことができない現状とも係わっている。こうした日本の研究状況にあって、竹村英輔氏が『獄中ノート』全体構造の分析仮説」として「非常に個別具体的な諸考察と、抽象度の高い理論次元の論題に関する諸考察」の「二重構造」論を提起した（同氏著『現代史におけるグラムシ』青木書店、1989年、47頁）ことは画期的であったと考えられる。

本論文は、この竹村説の「批判的な継承と発展」を目指して『ノート』全体の内的体系・論理構造・方法論などの「学的構造」を解明することを課題としている。とりわけ、竹村「二重構造」仮説によって提起された『ノート』全体の時期区分の特徴付け、つまり「個別具体的な事実やテーマ」中心の第一期（1929年～31年8月）、「抽象度の高い理論的性格の濃い覚え書が多い」第二期（1931年8月～33年12月）、および第一期の諸テーマや第二期の理論的内容などが「ふたたび具体性の次元に立ち戻って確認され、推敲される」第三期（1934年1月～35年）という「抽象と具体」を規準とした時期区分の特徴付けに対して、著者はグラムシの理論は一般的ではあるが「抽象」的ではなく、それ自身「具体」的（具体的普遍）なものであるとする立場から、各時期によって重点の移動はあるにしても『ノート』全体を「歴史」と「理論」の二重構造として再把握する。そして、前者の「歴史」に関しては、①「過去」の歴史としての「イタリア知識人史」、②「現在」の歴史としての「アメリカニズムとフォード主義」が主として探求され、また後者の「理論」については、③「哲学」と④「政治学」が集中して考察されており、これらが『ノート』全体の「四大主要テーマ」を形成しているとする。しかも著者は、この四大主要テーマこそ「哲学・政治・歴史の同一性」（つまり、「政治」を通じて「歴史」となる「哲学」）というグラムシ自身の哲学的命題に照応した主題構成になっていることを喝破する。

さらに著者は、この四大主要テーマをも包含した『ノート』全編の「基調テーマ」が「知識人-民衆ブロック」の形成であり（グラムシにとって哲学の「根本問題」は、その哲学によって統一される「社会的

ブロック」の形成問題だからである), それを通じて経済生活に対する民衆自身の意識と実践的態度の変革(知的道徳的改革)が達成されて成立する「歴史的ブロック」の概念が全編を貫く包括的な概念枠組みをなしていると把握する。と言うのも, 知識人-民衆ブロックを統一する「哲学」や「イデオロギー」は, マルクス主義で云う「上部構造」であり, これと「経済構造」=「土台」との関係にこそグラムシの云う「実践の哲学」理論の「統一的中心」があり, この両構造の一体性を彼は「歴史的ブロック」と呼んでいるからである。また著者によると, グラムシにはもう一つの「歴史的ブロック」概念が存在し, それは人間を, ①「純個人的・主観的諸要素」, および「その個人が活動的に関係している」ところの②「集团的諸要素」と③「客観的・物質的な諸要素」の三要素の「歴史的ブロック」とする考え方である。そして, 「人間」は当の「個人」であると同時に, この「個人」を一要素として自己に包括した複合的全体(自己包括的複合体)であることが, ヘーゲルの個別・特殊・普遍の弁証法に基づいて明らかにされる。なお著者がここで重視するのが上記個人の「活動的關係 *rapporto attivo*」であり, この「活動的關係」は遍在する関係として把握され, 「歴史」と「政治」の領域ではグラムシの概念として有名な「ヘゲモニー」となり, また「哲学」の領域では「実践」となると解される。

こうして, これまでグラムシ特有の概念として内外の多くの人々によって論じられてきた「歴史的ブロック」や「ヘゲモニー」などの個々の概念に体系的な位置付けが与えられ, その上さらに歴史と政治のユニークな「三次元方法論」が著者によって『獄中ノート』から導出される。それは, 「哲学」を根底の次元( $\alpha$ 次元)に据え, 歴史・政治研究において樹立され, それを用いて経験的分析が進められる固有の「方法論的諸規準 *criteri metodologici*」をなし, 「哲学」の翻訳・変換形態である「歴史と政治の研究と解釈の実際の諸規準 *canoni pratici*」の次元( $\beta$ 次元)と, 個別諸事象の観察・比較や類比・類推を通じて諸事象の固有性を捉える「歴史と政治の文献学 *filologia*」の次元( $\gamma$ 次元)からなる方法論である。しかも著者は, それがグラムシの社会学的分析の三次元方法論をもなしていると把握し, まさに19世紀のマルクスが「経済学批判」に精力を集中し「新しい経済学」を創出したのに対して, グラムシはとりわけ獄中において20世紀社会科学のアポリアを「社会学批判」に見出し「新しい社会学」を創始したと結論付けるのである。

## 2. 本論文の構成

上記のような著者の基本的見解が以下の章別構成で詳細に展開される。

### 序 『獄中ノート』研究の今日的課題

- 一 問題設定
- 二 『獄中ノート』の「非体系性」理解への批判
- 三 「実践の哲学」の自己包括的体系構造
- 四 先行研究の批判的な継承と発展
- 五 本書の構成

### I 『獄中ノート』の主題構成

はじめに

- 一 『獄中ノート』全容解説への諸説
- 二 獄中研究プランの展開
- 三 四大主要テーマとその相互関連
- 四 先行諸説の再考

むすび

## Ⅱ 「社会の科学」方法論の構造—哲学と経験科学—

- 一 問題の提起—経験的分析方法論の初稿と推敲稿
- 二 「实际的基準」と方法論探求の諸段階
- 三 哲学と文献学
- 四 哲学と「实际的基準」
- 五 「实际的基準」と「文献学」・「政治技術」
- 六 三次元方法論の構造とその学史的位置の問題

## Ⅲ 『獄中ノート』体系の理論的-方法論的構造

はじめに

- 一 哲学の「根本問題」と「活動的關係」
- 二 「歴史のプロック」と「活動的關係」・「ヘゲモニー」
- 三 「実践の哲学」の体系と主体的前提の三次元
- 四 基調テーマと包括的な概念・論理の枠組
- 五 国際的-民族的視点と歴史の三次元方法論

むすび

### 3. 各章の要旨

序では、『獄中ノート』の非体系性を強調し、そこにメリットがあるかのような理解に対して、著者は『ノート』が「そのままの出版を予定しない私的なノートである」が故に叙述様式としては未完結であり非体系的であるにしても、グラムシが彼の「体系」観に基づいてどれほど内的体系性を重視していたかが『ノート』の諸記述から最初に解明される。その上で、グラムシにとって哲学・政治学・経済学さらに歴史学は「同一の世界観の必然的構成要素」として「一つは他のものに含まれていて、全体が等質的な一つの円環を構成」しており、まさに彼の広義の「実践の哲学」はこうした「自己包括的体系構造」を有していることが浮き彫りにされる。さらに著者は、既述の竹村「二重構造」仮説に云う「個別具体的な諸考察」と「理論的次元の…諸考察」との間を結ぶ論理ないし方法論として前記の「三次元方法論」を把握することが必要だとして、それなしには『ノート』総体の体系的・構造的把握が不可能であると言明する。

第Ⅰ章では、一見バラバラに見える多様かつ広範な問題を論じている『獄中ノート』の主要な諸テーマの所在とそれらの内的関連ないし内的論理が解明される。そのため著者は『ノート』全容解明に関する先行諸研究を踏まえつつ、グラムシ自身の獄中研究プラン（Q1 プランと Q8 プラン）と、それに関連する彼の幾つかの獄中書簡をまず検討する。とりわけ1929年2月の Q1 プランからは、「歴史と歴史叙述との理論」（歴史方法論）、イタリア知識人史、「アメリカニズムとフォード主義」の三つが主要なテーマとして引き出され、また著者は1930年11～12月執筆と推定する Q8 プラン（これは二つの部分に別れており、異なった時期に執筆されたとする説もあるが、著者は「さしあたり…一体として捉えている」）に「哲学研究」と「マキアヴェッリ」の論題も記載されていることなどから、①「イタリア知識人史」、②「アメリカニズムとフォード主義」、③「哲学」、④「政治学」の四大主要テーマが「一時的・偶発的」ではない「一貫したテーマ」として確定される。そして、これら四大主要テーマの既述のような相互関連が考察された後で、『ノート』全容解明に係わる竹村説と松田博「第三インター批判」強調説が再考される。なかでも、

竹村説に対しては、「問題設定としては理論的テーマが、Q1の最初から…明確に位置づけられていたこと」を指摘し、また「グラムシの追求する『理論』そのものの具体性（理論における普遍的『真理』の『具体性』という弁証法）がなぜか理解されず、理論はつねに『抽象的』なものと考える理論観」が批判される。こうして、「実践の哲学」はグラムシにおいて「唯一の具体的な哲学」であることを著者は強調する。

質量ともに明らかに充実している第Ⅱ章では、とりわけQ4とQ16などの多数の諸論考におけるグラムシの経験的社会科学方法論の練成過程（Q19までの7段階）が分析され、「社会の科学」方法論として既述の「三次元方法論」が析出・探求される。そこで最も注目すべきは、上述の「具体的な哲学」と「文献学」との間に「実際の諸基準」が導出され、それら三次元の相互関連が考察されていることである。著者によると、グラムシのこの「実際の諸基準」は、諸観察と「経験的諸基準」の集積として経験的個別諸事象や直接的事実関係の次元に属する「文献学」とは異なり経験論的なものではなく、「『哲学』を『実際の歴史』の研究方法論の形態に『翻訳』したものである」とされる。そして、こうした「翻訳」が必要とされるのは、文献学の方法では現実の諸事象の「生成、変化、発展（ついには消滅）の歴史的内在的必然性」の次元を捕捉しうるものではなく、この次元の把握は「経験的諸事実・諸事象の歴史的意味の『解釈』」に関わっており、その意味解釈は、歴史総体の枠組み把握に規定され、枠組み把握の仕方は、結局、歴史観（世界観、哲学）の問題となる」からである。また著者は、リカード経済学などに由来する「傾向的法則」概念を直接的事実関係の次元（つまり「文献学」の方法で捕捉しうる次元）に成立する範疇と規定し、この「次元においては『弁証法』がそのまま現れない」とする。かくして、グラムシの「三次元方法論」において、「文献学」は「実践の哲学」に基礎付けられねばならず、その両者を媒介するのが「実際の諸基準」であり、さらにG. ヴィーコ『新しい学』での提起を踏まえながら「経験的」研究の手順としては「文献学」的接近の先行性を重視することが解明される。

加えて著者は第Ⅱ章で、有名なマルクスの『経済学批判』『序言定式』と「フォイエルバッハに関するテーゼ」がグラムシにとってはこの「実際の諸基準」次元に属するものであることを明らかにする。そして、多くのマルクス主義者による「序言定式」の経済決定論的解釈を排して、『『実践として』『現実』を『主体的に捉える』』後者の「テーゼ」を支点に「序言定式」の新たな解釈をグラムシが遂行したとする。こうして、『獄中ノート』におけるブハーリン批判の位相が著者によって確定されるが、当時「上部構造の問題をもっとも包括的に扱った」（ブハーリン著、佐野勝隆・石川晃弘訳『史的唯物論』訳者「解説」、青木書店「現代社会学体系7」、1974年、418頁）とされる同書の副題は「マルクス主義社会学の一般的教科書」となっており、その批判を通じて獄中のグラムシが自らの「新しい社会学」の構築を意図していたことを著者は重視する。また、その社会学においては「人間の意識における〔下部〕構造の上部構造への超克的練成を表示する」グラムシの「カタルシス」概念がとりわけ重要な位置を占め、彼も「構造」の先位性を認めるにしてもこの「カタルシスの過程」を通じて、「構造は人間を圧迫し、自己に同化し、受動的にさせる外部の力から、自由の手段に、新しい倫理-政治的形態を創造するための用具に、新しいイニシアティブの源泉に転化する」という「弁証法的発展」（「実際の弁証法」ないし「歴史的諸力の弁証法」）の「実際の基準」が、「必然性の自由への移行」や「客観の主体への移行」、とりわけ「量から質への移行・量-質弁証法」（グラムシにとって構造は量=必然性であり、上部構造は質=自由であり、量-質の弁証法は必然性-自由の弁証法と同一である）という「哲学」と「哲学的弁証法」の次元に基づいて導出されていることを著者は解明する。また、このようにして他の「実際の諸基準」を構成する「情勢-力関係分析の諸基準」、「国家分析基準としての政治社会-市民社会」、「知識人-階級関係」の基準、「受動的革命」概念などに

についても詳細に分析しつつ、「概念として内包的にも外延的にも十全な発展をとげた形態において構成されている」グラムシの「実際の基準」とヴェーバーの「理想型」との類似性が指摘される。

最後の「コンパクトに凝縮」された第Ⅲ章では、前の二つの章で明らかにされた『獄中ノート』の四大主要テーマと三次元方法論を踏まえ、その全体構造をより十全に説明することを意図して、四大主要テーマをも貫いて『ノート』全体の基調をなすテーマが何であり、それを捉えるための論理や基底範疇がいかなるものなのかが探求される。著者は、まずグラムシにとって「哲学の根本問題」は、その哲学によって形成される「社会的ブロック」全体のイデオロギー的統一性を保持することであり、その「ブロック」の構成者は知識人と民衆であるから、この「知識人と民衆の社会的ブロック」形成こそが『ノート』全体を貫く基調テーマをなしているとする。そして、この知識人と民衆の関係は既述のような「活動的關係 *rapporto attivo*」にほかならず、この「活動的關係」（つまり「歴史」と「政治」の領域では「ヘゲモニー」、  
「哲学」の領域では「実践」）概念が『ノート』の基底範疇となっていることが明らかにされる。また、この「社会的ブロック」と包括的概念枠組である既述の「歴史のブロック」との関係、および独自の主体次元として個人（これが知識人概念の前提になる）が重視される「歴史主体の三次元」の総体によって形成される「集団的意思」の問題などが論じられ、最後に『ノート』における既述の「理論」と「歴史」の二重構造の基礎をなすのが「実践の哲学」の弁証法・認識論であり、その「実践の哲学」の自立的全体性というグラムシの観点の重要性が確認されるのである。

#### 【論文審査の結果の要旨】

公聴会および審査委員会は2010年3月29日に開催された。

公聴会での議論を踏まえて開催された審査委員会においては、以下のような評価点と今後の課題が確認された。

1. グラムシ『獄中ノート』はそのまま公刊されることを予定して執筆されたものではなく、また獄中での文献や資料の制約、さらにはファシスト権力による弾圧への危惧とモスクワにいた家族への配慮などもあり、個々の草稿は断片的なメモないし慎重なノートの段階にとどまっているために、その全体構造や内的論理を説明することが著しく困難な状況にあるにも拘らず、著者は内外の先行研究を踏まえながら『ノート』原文の緻密な文献学的検討を30年余に渡って遂行し、その方法論や体系的論理構造を本論文でダイナミックに説明しえていることは大いに評価できる。
2. とりわけ著者が先行研究として最も重視している竹村英輔著『グラムシの思想』（青木書店、1975年）と同著『現代史におけるグラムシ』（青木書店、1989年）の「批判的継承と発展」という試みの多くは成功しているものと判断される。なかでも、『ノート』における「個別具体的な諸考察」と「抽象度の高い理論的次元の諸考察」という竹村「二重構造」仮説に対して著者が提示する「理論と歴史」の「二重構造」仮説は、今後における『ノート』全編の解説により多く貢献しうるものと評価しうる。
3. また、上記の「理論と歴史」が『ノート』の研究テーマとして、「理論」に関しては①「哲学」、②「政治学」、そして「歴史」については③「イタリア知識人史」（過去の歴史）、④「アメリカニズムとフォード主義」（現在の歴史）の「四大主要テーマ」となっているという仮説は、グラムシの「哲学・政治・歴史の同一性」という哲学的命題に照応しており、同様に『ノート』全編の解説を前進させる可能性を有すると判断される。
4. さらに、四大主要テーマを含む『ノート』全編の「基調テーマ」が「知識人-民衆ブロック」の形成で

あり、グラムシ固有の「歴史的ブロック」概念が全編を貫く包括的概念枠組をなすという仮説も、彼にとって「哲学の根本問題」がその哲学によって統一される「社会的ブロック」の形成問題であることを考慮すると高い妥当性を有すると思われる。また彼の二つの「歴史的ブロック」概念についての著者による分析は、先行研究（例えば、著者は本論文では参照していないが、Hugues Portelli, *Gramsci et le Bloc historique*, PUF, 1972）を越える内容を幾つか含んでいると判断される。

5. その上、人間を既述の三要素の「歴史的ブロック」として把握するグラムシの論考から著者が引き出した「活動的關係」概念は、これまで多くの研究者によって論じられてきた「ヘゲモニー」や「実践」の概念に新しい光を与えうる重要な貢献であると評価しうる。

6. 加えて、著者は「ヘゲモニー」の内的論理を綿密に検討しているが、このヘゲモニー概念は今日、カルチュラル・スタディーズ等の研究で非常に大きな影響を与えているものである。著者は、グラムシが「ヘゲモニー」機能の一つを「支配的な基本的集団によって社会生活に刷り込まれる方針に対して広範な住民大衆が与える『自発的』同意」に見出したことを指摘している。この『『自発的』同意』に関して、著者はそれが自然発生的に生み出す集団的圧力が「不同意者に対して支配階級が行使する直接的強制を補完する間接的強制として作用する」（111頁）としてその本質を的確に把握している。このような理解は、マルクスのイデオロギー論やフランクフルト学派の文化産業論にも連なるものであり、広く社会学理論の見地から見て今日でも有意義なものと判断しうる。

7. 歴史と政治、さらには社会学的分析の「三次元方法論」は、本論文で最も詳細に解明されている秀逸な仮説であり、『ノート』全容の解明を飛躍的に向上させうる可能性を有していると評価しうる。しかし、この方法論の、『ノート』解説を超えた普遍的妥当性の検証は残された今後の主要な課題の一つであろう。

8. グラムシが20世紀社会科学のアポリアを「社会学批判」に見出し「新しい社会学」を創始したという著者の見解は極めて重要な指摘であり大いに熟考に値すると思われるが、その社会学の内容・性格の解明をも含め、この点の検証もさらに詳細になされる必要があると考えられる。

9. 『獄中ノート』原語以外のイタリア語や英語の関連文献も使用されているが、著者の仮説を立証するためにも今後はさらに広い外国語文献の活用が必要とされる。

### 【試験または学力確認の結果の要旨】

本論文の著者は本学社会学研究科応用社会学専攻博士課程後期課程に3年以上在籍し、学則に定める履修要件を充足している。なお、著者は1980年3月に上記課程を満期退学してからも外国語文献・資料を多数読みこなした上での論文作成や学会発表等により、また何よりも本論文の内容によって、外国語を含む学力確認は十分行い得たと判断する。故に、本学学位規程第25条第1項に基づき、試験等の学力確認を免除するものとする。

審査委員会として以上の諸点を評価し、今後の課題を確認した。それを踏まえて、審査委員会は本論文が本学学位規程第18条第2項に基づく学位授与に十分値すると判断するに至った。

|      |                          |
|------|--------------------------|
| 審査委員 | (主査) 深澤 敦 立命館大学産業社会学部教授  |
|      | (副査) 石倉 康次 立命館大学産業社会学部教授 |
|      | (副査) 日暮 雅夫 立命館大学産業社会学部教授 |